

釈迦堂「殉死の墓」

低い石垣の中の 24 基の墓は、徳川家の家臣たちのものである。徳川家は、1603 年から 1867 年まで江戸幕府として日本を統治した。これらの 24 人の家臣達は 1610 年から 1668 年の間に亡くなりました。

左から、最前列の最初の 5 つの墓は、3 代将軍徳川家光（1604-1651）の側近の武士で、あの世へ行っても、将軍に仕えるために、将軍の死後、殉死として知られる慣習にのっとり切腹自殺したのである。忠誠心は武士文化の特徴であり、殉死はおそらくその最たる例である。

忠誠心の源は「武士道」にあり、武士の行動と倫理の非公式の規範であり、死に至るまで忠誠心を要求ししていた。日本の戦国時代（1467～1568 年）、これらの儀式的な自殺は通常、主人が殺されたり捕らえられたりしたときに戦場で行われた。日本が徳川政権下で平和の時代に入った後、このような戦場での暴力的な死は過去のものとなった。しかし、多くの家臣は忠誠心を示すために、切腹作法の練習を続け、彼らの領主が静かに自然死したときでさえ自殺した。

殉死は、1663 年に第 4 代将軍徳川家綱（1641～80）によって法律で禁止された。